

# 平成 30 年度研究推進方針（案）

平成 30 年 4 月 11 日  
研究推進委員会

## 1 はじめに

昨年度、3年間の道徳教育研究協力校としての道徳教育の研究を終え、今年度は、道徳科がスタートする新たな1年目を迎える。

3年間の研究を終え、本校の一定の研究の形が整い、どの教職員も、それぞれに道徳の授業力をつけ、年間を通して、質の高い深く考える道徳の授業を行うことができた。また、それぞれの分掌・担当で、全校での取組を行って行く中で、児童が落ち着いて学習や生活、行事に取り組むことができるようになり、児童の変容・成長が見られた3年間であった。道徳教育に重点的に取り組むことで、本質的な児童の内面の大きな成長と行動の変化につながったと教師自身が実感できたことが最大の成果である。

しかし、本校の児童には、依然として課題も多い。

学習の面では、学力が少しずつ上がってきているものの、基礎・基本の定着が弱いこと、思考力や表現力に課題が見られること、そして家庭を含めた学習力が低いことなどがあげられる。生活面でも、規範意識に欠けている面があり、主体性がなく周りに流されやすい児童が多いことが課題である。また、話す力がついてはきているものの、聞く力はさらに改善の余地がある。

また、道徳の時間では、よい意見を言ったり、よく考えたりできていても、子どもたちの意識の中でそれが実際の生活につながっていなかったり、実践に積極的に生かすことができていないことは長い間の課題である。

今年度は、道徳科がスタートする1年目ということで、教科化としての道徳の授業のあり方について考えていくとともに、今までの研究を引き続き深めていけるようにしたい。また、児童の実践面について、どう成長させていくか検討し、根気よく全校での取組を積み重ねていきたい。

具体的な研究内容については、今年度は3年間の研究を基盤に、さらに深く考え、自分の生き方を見つめ直せる授業の在り方の研究に取り組んでいきたい。

道徳の授業については、3年間積み上げてきた、資料や話し合いを通して、自分の生き方を考え、友だちの考えと比べることによって、自分の生き方を見つめ直せるような授業の在り方を引き続き研究していく。今年度は、教科化の時代に合った道徳の授業のあり方と、年間指導計画等の見直しや評価についても研究を深めていきたい。

そして、授業で学んだことをその授業の中だけで完結させず、実生活で生かしたり、授業で学んだことと実生活での体験が子どもたちの意識の中でつながるような、本質的な学びをさせることを目指していきたい。実際に子どもたちが成長するのは、道徳の時間だけではなく、すべての教育活動の中であるという共通理解のもと、子どもたちの意識の連続化を図るため、様々な授業・場面の中で、計画的・意図的な活動を取り入れ、実際の生活の場で実践していけるように取組を行っていきたい。

今年度は、全校の活動の中において、歌声を響かせることで、児童の心に響く取組にも挑戦したい。また、子どもたちが変わるためには、学校の中だけではなく、家庭の力が不可欠ということがこの数年の道徳教育の取組で明らかになってきた。今年度は、地域や家庭を巻き込みながら、一体となって、子どもたちを成長させていけるような取組を行っていきたい。

研究にあたっては、引き続き四天王寺大学教育学部教育学科准教授の杉中康平先生に助言をいただきながら、今年度も研究を進めていく。

最後に、これらの研究を進めていくにあたっては、全教職員が常に同じベクトルで、1年間モチベーションを保ち続けながら、道徳教育に取り組んでいくことが重要となってくる。道徳の授業だけでなく、日常のあらゆる生活場面において、いかに児童を成長させていくかということについて、常に共通理解をはかりながら、取り組んでいきたい。

すべての子を「棚倉小の子」という感覚で、自分のクラスの子と同じ感覚で声をかけ、指導をしていく風土の中で、重点研究を進めていきたい。

## 2 研究主題

自己を見つめ、よりよく生きようとする児童の育成  
～仲間とともに考え、高め合う道徳教育を通して～

## 3 主題設定の理由

子ども達は社会情勢の変化の中で、主体的に判断し、行動できる力を身に付けていかなければならない。そのためには、一人一人が自分に自信を持ち、自己の生き方についての考えを深め、自己をしっかりと確立できるようにすることが大切である。

そこで本校では、自らの思いを伝え、仲間と共に考えることにより、自分に自信を持ち、自己をしっかりと確立し、よりよく生きようとする児童が育成できるのではないかと考え、本主題を設定した。

道徳の時間においては、教材を通して話し合い、自分の生き方を考えると共に、自分の考えと友だちの考えを比べることによって、自分の生き方を見つめ直し、新たな考えを生み出せるような授業の在り方を研究していく。そのために深く考えさせる発問の方法、話し合いの工夫など、様々な観点から研究を進めていこうと考えた。

また、道徳の時間だけでなく、全ての教科・領域をはじめ教育活動全体との関連を大切にし、思いを伝え合う活動を取り入れ、仲間とともに考える中で、お互いを高め合い、実際の生活の場で実践していこうとする意欲や態度を育てていこうと考える。

## 4 道徳教育重点目標

- 相手のことを考え、助け合い励まし合う子どもを育てる。(友情・信頼)
- より高い目標に向かって、最後までやり抜こうとする子どもを育てる。  
(希望と勇気、努力と強い意志)
- みんなが気持ちよく過ごすために、進んでみんなのために役立つようとする子どもを育てる。  
(勤労・公共の精神)

道徳の時間では、上記の3点を重点的に指導していくこと、そして教育活動全体においても、この3点を意識しながら、豊かな体験の場を設定し、指導していく。

## 5 具体的取組

### (1) 道徳の授業を通して

- ・魅力ある教材を提示し、心を揺さぶるような授業を実践する。
- ・自分を深く見つめ、考えさせる発問の方法を研究し、実践する。
- ・道徳の時間において、自分の思いを書いたり、伝えたりする機会を設定する。
- ・実生活でより実践力を高められるような授業の工夫をする。

### (2) 教育活動全体を通して

- ・道徳以外の教科においても、多様な学習形態を有効に取り入れ、自分の思いや考えを伝える場を充実させる。
- ・行事や特別活動など、様々な場面において、思いを伝え合う活動を取り入れる。
- ・道徳の時間で学んだ事などを実践していこうとする意欲や態度を育てられるよう、児童が意欲をもって取り組むことができる様々な活動場面を設定し、教職員の意思統一を図りながら、全校で取り組む。

## 6 研究内容

### (1) 実態把握

#### (ア) 児童アンケート

道徳および生活に関するアンケートを年度初めと終わりの2度実施し、児童の実態把握に努める。

#### (イ) 学級のめあて・計画の作成

児童アンケートの結果と本校の重点目標から、各学級のめあてを作り、それを達成するための計画を作成する。

→アンケートについては、年度始めは実施しない。昨年度末の学年全体の実態から、学年でどう取り組んでいくかについて考える。学級経営案等に、学級で重点的に取り組むことを盛り込んでいく。

### (2) 授業に関する研究（授業研究部）

#### ① 年間指導計画（別葉）

児童の実態に応じた教材を活用し、計画的に指導をしていくため、年間指導計画を作成する。教材は、教科書や副読本、「京の子ども 明日へのとびら」（わたしたとの道徳）を指導計画の中に位置づけ、年間を通して、計画的に実施できるようにする。また、道徳の時間を核として他の教育活動との関連を図るものを学期に一度実施し、他教科・領域やその他の教育活動を効果的にリンクさせる。そして、児童が道徳の時間で学んだ道徳的価値を実践し、さらに道徳性を育む場を設定していく。書く行事や日常の活動とのつながりを大切にし、教育活動全体を通しての道徳教育を進めていけるようにする。

（平成30年度については、教科書を中心とした年間指導計画を作成していく必要がある。）

#### ② 総合単元的道徳学習

総合単元的道徳学習を学期に1度計画・実施する。育てたい児童の姿を目指し、より効果的に道徳性を育めるよう、道徳や他の教科、そして日常の生活での指導を意図的に計画し、意識の連続化を図る。

総合単元的道徳学習の終了後には、児童自身にその期間の振り返りをさせ、自分を客観的に見つめ直し、自分の生活に返していけるようにする。

教師も、終了後、計画をふり返り、成果と課題を明らかにし、日常生活や次の指導へと生かしていくようにしている。

#### ③ 週1回の授業を大切にするために

道徳の授業の際には、「第〇回道徳」という掲示を、全校で統一して行うようにしている。

教師側では、年間35時間の道徳の時間を確実に実施する意識を持つと共に、児童も毎週の授業の積み重ねを意識することができる。週1回の道徳の授業を教師も児童も意識しながら大切にしようとする気持ちができてきている。

#### ④ 授業づくり

「考え、議論する道徳」を目指すために、答えが一つでない課題についてみんなで向き合い、話し合うことによって、人間としての生き方について自覚を深めていけるような道徳の授業形態を考えていく。道徳ノートの活用をはじめ、ペアトークやグループトーク、役割演技等の多様な指導方法を工夫する。また、授業の始めと終わりで、児童の中に気づきや考えの変化があるような授業展開を大切にする。板書についても、価値をとらえやすくするための構造化されたものとなるようにする。

## ア 教材分析シート（道徳的生き方等が変化する教材の場合）

教材分析にあたっては、杉中准教授が提唱されている分析の方法を用い、本校の教材分析シートを作成した。

教材の場面を「Before(道徳的な変化前)」「助言者の登場」「転(道徳的变化)、After(変化後)」の3つの場面に分けて考える。主人公の道徳的变化前の姿と後の姿に焦点を当て、主人公が何に気づき、どのように価値に気づいたかを明らかにすること、詳細な読みに陥らないよう一文読みをすることで、教材をシンプルにとらえやすくなった。

## イ 発問（中心発問・補助発問）

教材分析から発問を大きく3つ（3種類）にする。道徳的問題を明らかにする「Beforeの発問」、主人公の気づきに迫る「転又はAfterの発問」、そして道徳的価値をおさえるための「価値追求の発問」である。その発問に加え、より価値に向かい、価値を深めるための補助発問を用意しておく。この補助発問は、授業において使用しないこともあるが、この補助発問により、より価値に迫ることができることが多い。補助発問は、時に主人公でなく、主人公を取り巻く他の登場人物の気持ちを問う場合もある。

このように、発問を吟味することで、前半の時間を短縮し、中心発問と後段で十分練り合えるような時間を確保するようにしている。

## ウ 伝え合う力

伝え合う力を育成するため、ペア・グループ・全体等、様々な形態での話し合い活動を取り入れる。その際、自分の考えをまとめるための時間の確保を行い、考えたことをペアやグループで交流させる。そしてそれを全体へと広げていくようにする。少人数での交流により、一人一人が自分の考えを表現し、議論することができる場とする。

ペア・グループ学習は、道徳の時間だけでなく、各教科で積極的に取り入れたり、特別活動などの場で思いを表現する場面を設定したりすることで、伝え合う力を付けていくようにする。

また、道徳の時間の振り返りについては、自己に引きつけて考え、どんな学びがあったかを振り返るようにしている。さらにそれをお互いに伝え合い、共有することで、その時間の学びが深まると考えられるので、この時間を大切にし、多くの時間を取るようにしている。

## エ 道徳ファイル・道徳ノート

児童に自分の考えを持たせる、そして自分の考えをもとに話し合うことが、考えを深め合い、道徳的価値やねらいに迫ることにつながる。道徳ノートを使用し、書いてまとめる活動を取り入れることによって、自分の考えを整理し、発言しやすいようにする。また終末で、1時間の道徳の時間を振り返ることで、より深く道徳的価値について自覚することができると思う。

さらにそれを毎時間ファイルに綴ることで、ポートフォリオとし、道徳の時間の評価につなげる一手段とする。この評価は教師のみならず、児童が自らを振り返って、成長を実感し、これからの課題を見つけるという児童自身の評価となるよう、道徳ノートを活用していきたい。

## ⑤ 評価

児童の成長を見守り、努力を認めたり、励ましたりすることによって、児童が自らの成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指すための研究を行う。

- ・ 道德の時間における道德ノートによるポートフォリオ評価
- ・ 道德の時間以外の教育活動全体における児童の成長の様子によるパフォーマンス評価
- ・ 児童自身の振り返りも評価に入れる。

## ⑥ ローテーション授業

1つの道德の教材を作成し、一人の教師が自分のクラスと隣のクラスの両クラスで授業を実施するローテーション授業にも取り組んだ。1つの教材研究に時間をかけることができ、また同じ教材で2回授業ができるので、改善をしながら授業ができ、授業力の向上が期待できる。また、他クラスの状況を把握できることによって、自分のクラスだけでなく、学年の児童としてとらえ、課題を共有することができる。

## ⑦ 授業研究

各クラス1回、年間計12回の研究授業（うち杉中准教授に指導を頂く全校での授業研究3回、ブロック学年での授業研究9回）を行う。

指導案の作成に当たっては、考えを深め合う道德の授業づくりをする上で、工夫するポイントや授業改善の視点を明確にし、意識するようにする。

研究授業前には、指導案をもとに事前研究会を実施し、授業後には、授業評価シートをもとに、事後研究会を充実させることで、全教職員が課題を共有し、日常の指導へとつなげていけるようにする。

ブロック授業研究会では、事前研究会・事後研究会は校内研究会として同日に設定し、その他の先行授業や研究授業はブロック学年ごとに行う。

どの担任も、年間に一度は研究授業を行うことで、全教職員の学びの場が増え、自らの授業への新たな視点を取り入れていくよい機会となり、お互いの刺激の場となっている。

- (例) 自主発表会（公開）・・・低・中・高  
全体研・・・低・中・高（うち杉中先生1本）  
ブロック研・・・中・高  
小中連携・・・低・中・高

## ⑧ 研究授業のまとめ

各事後研究会後には、授業研究部を中心として、研究授業から見えた課題や方向性についてまとめる。記録として残していき、各授業研究での成果と課題を、次の授業へとつなげていくようにしている。

## ⑨ 教師の道德ノート

授業計画をするにあたって、最低限、明確にしておきたい項目を作り、授業における留意点も明記した。また、授業での児童の発言などを書きとめておくメモ欄を作り評価の一材料とするため、教師の道德ノートを作成した。

これは、教師自身の授業の振り返りとしても活用している。

## ⑩ 親子で道德

親子で道德週間を設定する。学校での道德の学習について家庭でも話し合う機会とする。学年末に振り返りシートを書き保護者のコメントをもらう。

### **(3) 教育活動全体を通して（実践活動部）**

#### **(ア) 合言葉「日本一輝こうチーム棚倉」**

「日本一輝こうチーム棚倉」を全校の合言葉として、それを目指してそれぞれの学級活動や委員会活動に工夫を加え、取り組んでいく。また、全校での統一した取組も行い、全教職員で共通理解を図りながら、重点的に取り組む。

(例)・児童会本部（「花いっぱい学校」、あいさつの取組）

- ・安全委員会（名札点検の取組）
- ・放送委員会（ファインプレーニュース） 等

#### **(イ) 歌**

#### **(ウ) 言語活動**

児童が、自分の思いや考えを積極的に話し合ったり、考えを深め合ったりできるように、学習場面や教育活動全般を通じて言語活動や環境を整える。各クラスや各学年の児童の実態によって、言語活動を充実させるための工夫を考え、取り組んでいる。

(例)・「話し方名人」「聞き方名人」

- ・宿題の作文と話し合い活動を組み合わせた取組 等

#### **(エ) 全校道徳（ファミリートーク）**

全校道徳を実施し、ファミリー班（縦割り班）を活用しながら、全校で一つのテーマについて考え、話し合える場を設ける。テーマについては、児童の身近な問題や話題を設定する。

6年生が中心となって話し合いを進め、各自が自分の思いをグループの中で語り合える機会とする。

#### **(オ) ボランティア活動 TCV（たなくらチャイルドボランティア）**

児童からボランティアを募り、校内をよりよくする活動をする。児童の自発的な活動の場を設定することで、仲間と一緒に自分たちの生活を自らよくしていこうとする雰囲気作りをしていく。（花いっぱいの学校づくり、校内美化活動など）

#### **(カ) 道徳通信**

研究授業後、保護者に向けて、授業の様子や児童の感想等を載せた道徳通信を発行し、保護者にも学校での取組を知ってもらい、連携して道徳に取り組んでいけるようにする。

また、地域や家庭と連携できるよう、学校から発信し、啓発・交流していく。

#### **(キ) 道徳コーナー**

道徳コーナーを設け、研究授業の授業の流れや児童の考えの流れが分かる掲示を行い、児童が立ち止まって道徳に触れ合える場を作る。授業の内容を掲示することで、児童の意識の連続化、さらに教師自身の意識の連続化を図る。

## 7 研究推進体制

(1) 研究推進委員会……校長、教頭、教務、研究主任（瀬戸）、  
ブロック代表（今川、吉川、高井）、授業研究部長（吉川）、実践活動部長（高井）

### (2) 専門部会

(ア) 授業研究部……◎吉川、荒川、今川、本田、中村、（瀬戸）、（教務）

(イ) 実践活動部……◎高井、大西、田口、清水、桂、福田、田中、市村、（瀬戸）、（教務）

### (3) 学年・ブロック部会

(ア) 低学年ブロック……田口、清水、今川、大西、（教頭）

(イ) 中学年ブロック……吉川、桂、瀬戸、福田、市村、（教務）

(ウ) 高学年ブロック……本田、高井、田中、中村臨、荒川、（校長）

### (4) 研究推進体制全体図

